

## 対話性の境界

ウーヴェ・ヨーンゾンの詩学

金 志成

第二次世界大戦後のドイツ文学を代表する作家のひとりであるウーヴェ・ヨーンゾン（1934-1984）は、東西分裂問題という政治的な主題に取り組みながらも、当時のドイツ文学において際立った技法意識を持っていた作家として知られ、その存命中は両側面のうちどちらかに偏った研究がドイツ本国およびアメリカという地域的に分断されたかたちで行われてきた。しかし作家の死および「壁」の崩壊を経た1990年前後からは、彼の文学的営為を包括的にとらえ直す気運が高まり、特にイギリス人研究者リオードンによる89年の博士論文を皮切りに、作家の「詩学」の問題と反省的に対決する研究が相次いで発表された。だが、こうした包括的・批評的な性格の研究は90年代中頃に一種の臨界点に達し、それと入れ替わるようにして今度は、叢書の創刊や協会の設立など、ロストックを拠点にしたヨーンゾン研究の制度化が進行し、とりわけ草稿や書簡のアーカイブ化および批判版全集プロジェクトが開始された直近の数年は、限定的なテーマ主義ないし実証主義的な研究が中心となりつつある。

本論文は、近年の知見を踏まえつつも、主としては90年代に見切りのつけられたヨーンゾンの詩学の問題をふたたびとりあげ、「対話性の境界」という独自の観点から更新を企てるものである。具体的には、構造主義的な物語論を暗黙の前提としていた当時の研究にとっていわば盲点であったところの言語的分節化の問題に焦点を当て、脱構築主義を始めとするポスト構造主義の言説を援用しつつ、当該の問題をヨーンゾンの文学における創造的な契機として見出すことを試みた。以下、各章ごとに概要を示す。

本論文は全7章により構成される。前半にあたる第1章から第4章まではエッセイや講演などの詩論的なテキストに焦点を当て、それぞれ「詩学」、「対話性」、「パフォーマンス性」、「現代性」をキーワードに論じた。

**第1章**では、本論文の主題である「詩学」という概念について文学史のおよび理論的な観点から検討し、研究の方向性を定めた。古代ギリシアに起源を持つ「詩学」は、ドイツ文学ではバロックから啓蒙期にかけて完成し、ロマン派の時代に解消したとされる。ところが20世紀の後半に入ると、実作者による「詩学講義」がフランクフルト大学で開始されたことによって、「詩学」という言葉は一種の制度的な枠組みにおいて復権を果たす。ただし、「詩学」は個別の作家名と結びついたことによって本来の普遍的な規範性はすでに失っており、この逆説的な状況を本論文は独自に〈ポスト詩学〉の状況と呼び表す。〈ポスト詩学〉の時代である戦後ドイツにおいて詩作を条件づけるのは先行する規範ではなく政治的・歴史的な現実であり、とりわけヨーンゾンにおいては東西ドイツの「境界線（Grenze）」が決定的な役割を果たしている。作家における現実と詩作の以上のような関係を「表されるものが表す手段を条件づける」という言葉で定式化したノイマンの先行研究を踏まえつつ、本論文においては「境界線」のイメージを、詩学と詩作の「境界」、経験的現実とフィクションの「境界」、作者と語りの審級の「境界」、さらには言語的分節化の「境界」へと敷衍していくという見通しを示した。

**第2章**では、ヨーンゾンの詩学研究においてもっとも大きな争点となってきた「語りの全知性への疑い」の問題に焦点を当てた。1961年のエッセイ『ベルリンのSバーン』でなされるこの言明は、作家の存命中はデビュー作『ヤーコプについての推測』のいわゆる「推測文体」のための「便利な解説者」（リオードン）として濫用されてきたが、90年前後からは構造主義的な物語論の立場から矛盾を指摘さ

れることとなった。それにたいして本論文は、ヨーンゾンの詩学におけるキー概念のひとつである「人物 (Person)」の機能を今世紀に入って改めて検討したシュタスツァクの先行研究を参照しつつ、当該の問題を作者と登場人物の関係をめぐるポスト構造主義の言説に接続することを試みた。具体的には、バフチンに由来する「エクソトピー」の概念をもとに作者の脱特権的な状況および登場人物の「他者性」を考察したド・マンの論文「ダイアログとダイアログ性」(1983)に依拠しながら、ヨーンゾンの「語りの全知性への疑い」には「人物」との対話的な契機が関連していることを指摘した。

**第3章**では、同じく『ベルリンのSバーン』に現れる詩論的プログラム「真実探求」を中心的に検討した。これについて先行研究が問題としていたのは、フィクションである文学を語る際に「真実」を持ち出すことの逆説である。この逆説には、虚構とはそもそも何かといった哲学的な問いへの萌芽も含まれているが、本論文はむしろ作家の言明を文芸的な修辞と見なし、同種の言説の系譜を辿りながらヨーンゾンのメルクマールを探った。その結果、彼の「真実探求」は、「(大文字の) 真実 (die Wahrheit)」を語る＝騙るイデオロギーの言説を批判し、複数の「部分真実」同士の対話に賭けるものであることが分かった。たとえばリオダンは、ほかならぬ作家のこのような姿勢に「語りの倫理」を見出そうとするが、それにたいして本論文は、ヨーンゾンの「真実」批判の背後には言語をめぐる脱構築的な問題意識があることに注目し、その観点から『ベルリンのSバーン』のテキスト全体を再検討した。最後に、先行研究においてほとんど言及されることのなかったブランショによるヨーンゾン論を参照しながら、作家の「真実探求」はパフォーマティブな性格のものであると結論づけた。

**第4章**では、『ベルリンのSバーン』と並んでもっとも重要な詩論的テキストとされる『長篇小説を検討するための諸提案』(1975)を主にとりあげ、作家の詩学における「モダニティー」の問題を論じた。直線的に展開する歴史イメージを前提とするヨーンゾンは、普遍的な「傑作」という観念に懐疑を示す一方で、ハイネの詩節を変奏しながら「新しさ」が持つ根源的な性格をも強調する。この二重性を解明するために本論文は、作家がベンヤミンをつうじてボードレールを間接的に受容していた可能性を指摘しつつ、『現代生活の画家』を始めとするボードレールの諸論考と比較検討し、それによって「表されるものが表す手段を条件づける」というノイマンの定式に「現代性」という時間的な契機を読み込んだ。章の最終節では以上の議論に接続するかたちで、先行研究におけるベンヤミンのボードレール論の受容史を整理した。代表的なものとして、ヨーンゾンの詩学における「コレスポンドス」的あるいは「アレゴリー」的な契機をそれぞれ強調するシュトルツ＝ザールおよびシャハリッツによる両極的な研究を批判的に紹介し、両契機の緊張関係ないし前者から後者への移行に焦点を当てるといふ本論文の立場を明らかにした。

後半にあたる第5章から第7章にかけては、三冊の小説作品を各章で独立してとりあげ、それぞれ前半部での理論的考察を応用して分析した。

**第5章**では、ヨーンゾンのデビュー作『ヤーコブについての推測』(1951)を扱った。導入として本作の一般的な構造およびその多面的な「難解さ」を整理しつつ、論考の焦点を「対話性」の問題に定め、基準となる先行研究としてアメリカの研究者ボンドによる論文をとりあげた。ヨーンゾンの小説にたいするバフチンのポリフォニー理論の応用を試みるボンドは、『ヤーコブについての推測』のテキストにおけるさまざまな位相での「対話的形式」を指摘していくが、とりわけ注目に値するのは、ひとりの人物の発話のなかにすら複数の「ラング」の混在＝「対話」が生じているというテーゼである。ただし同研究にはいくつかの点で発展の余地があり、それを引き受けることが本章の主な課題となる。

ひとつは、ボンドが三人の主要登場人物に与えられた内的モノローグのパートを分析対象としなかったことである。聞かれる相手を想定しないモノローグにおいてもなお対話的な契機が見出されるならば、

本小説の対話性はさらに徹底的なものであるということになる。本論文は、とりわけシュタージという設定柄、イデオロギー的な確信がもっとも強いロールフスに敢えて注目し、本来的には「公定的ディスクール」(ホルキスト)であるところの彼のモノローグがヤーコプという「他者」との出会いによってダイアローグ化する過程を分析した。

もうひとつ、ボンダが考慮に入れていなかったのは、こうした対話性そのものが解消される諸契機である。それは先に見たロールフスのモノローグにおいてもすでに、「ドイツ民主共和国」という同一のシニフィアンが相互排他的な二つの意図のもとに発話される瞬間にも現れていた。またこの問題は、ある種の思弁的な言語懐疑としても作品の動機のひとつを成しており、それはとりわけ主要登場人物のひとつであるヨナス・ブラッハにおいてアイロニカルに形象化されている。しかしより重要であるのは、こうした対話性の「境界」がパフォーマティブに演出される瞬間であり、それはもうひとりの主要登場人物であるゲジーネ・クレスパールのモノローグに見出される。『ヤーコプについての推測』は基調としては、東西の諜報員および東側の反体制知識人による三つ巴を描いたきわめて政治色の強い作品であるが、ゲジーネのパートの一部は例外的に主人公ヤーコプとの恋愛という私的な関係性が動機となっており、アーレントとともにいえば、「私的な領域」における「愛」とは、「複数性」や「言葉」が介在しない「無世界的」なものである。また、ここで出来る超言語的な状態は小説テキスト全体において例外をなすだけでなく、その美的な構造のために決定的な役割を果たしているため、対話性の「境界」にこそ作家の文学的創造力がもっとも発揮されるという本稿のテーゼが確認される。

また、当該の箇所においては、「並木」の風景や共感覚的な描写など、ボードレルの詩「コレスポンダンス」との間テキスト的な照応が見出されるだけでなく、こうした「コレスポンダンス」の状態がテキストにおいて瞬間的にしか出来しないこと、あるいはそれがゲジーネによって「想起」されたものであるという点でも、ベンヤミン＝ボードレル的な「現代性」の特性が現れている。さらにこの場面が続いて、ゲジーネとヤーコプはそれぞれ相手に〈西〉と〈東〉の「アレゴリー」を見出すことで破局するため、前章の最後で示した「コレスポンダンス」から「アレゴリー」への移行という本論文の理論的なテーゼが小説テキストにおいて確認されることになる。

**第6章**では、短篇小説の『イースターの水』(1964)を扱った。「模範的な短篇小説」(メクレンブルク)とされる本作は、独立した物語として著しい完結性を持つ一方で、デビュー作の主要登場人物のひとつであったゲジーネを主人公としている点ではヨンゾン文学全体の文脈のなかにあるため、本章は両側面のそれぞれに焦点を当てた。作品内在的な分析に従事する前半部では、プロップによる昔話の機能分類を適用しながら本作を古典的なイニシエーションの物語としてとらえ、なおかつ「鏡」や「水」のモチーフについて精神分析的な観点から解釈した。

後半部では本作を、ゲジーネ・クレスパールを中心とする超作品的な物語世界の一部として位置づけることを試み、まずは『ヤーコプについての推測』との間テキスト的分析を行った。具体的には、同長篇小説におけるゲジーネのモノローグを改めて引きつつ、両テキストが彼女の想起をつうじて媒介されること、そしてその想起される過去においてはヤーコプへの恋愛感情と終戦直後のトラウマ的な記憶が表裏一体になっていることを、フィッカートによる先行研究を踏まえつつ分析した。

次いで、第7章を部分的に先取りするかたちで『記念の日々』との間テキスト的な分析を行い、こちらにおいてもゲジーネの想起が媒介的な契機となっていること、さらにはその際に「日付」が重要な役割を果たしていることを指摘した。だがより注目し値するのは、『記念の日々』において『イースターの水』の物語がある特殊なかたちで言及される点である。つまり、両テキストは同一の世界を舞台にしているのだが、人物設定をめぐる事実関係で決定的な矛盾を犯しており、そのことが『記念の日々』のなかでゲジーネの口をつうじて訂正されるのである。これは登場人物との対話的な関係というヨンゾン

の詩学原理に抵触する事態であり、それは同時に対話性の「限界 (Grenze)」が、きわめて否定的なかたちで露呈する瞬間となる。もっとも、前章で『ヤーコプについての推測』について見たように、対話性の「境界=限界 (Grenze)」はヨーンゾンの詩学における創造的かつ肯定的な契機ともなり、次章でも同様の観点からヨーンゾンの最終作が検討される。

**第7章**ではヨーンゾンの最後の小説にして代表作である『記念の日々：ゲジーネ・クレスパールの生活から』(1970-1983)をとりあげた。導入として、最新の伝記研究を参照しつつ、十数年という時間が費やされた完成までの道程を辿ることで、本作が完結性ないし全体性の美学に基づく作品であることをまずは外側から示し、論考の出発点とした。テキストそのものの構成原理に鑑みても、本作の完結性への志向は明らかであり、それは表題にすでに現れている。すなわち、「記念の日々 (Jahrestage)」とは字義的には「一年の日々 (Jahrestage)」を意味し、これは1967年8月21日から翌年の8月20日までの366日が各章を構成するという本作の形式を表しているのだが、ホノルトの先行研究によれば、モデルでの諸条件においては暦という客観的な指標によってのみ「全体性への予感」を表象することが可能となる。

本章の次の課題は、ホノルトのテーゼを継承しつつ、本作における暦の機能をより具体的に分析することである。表題が表す「一年の日々」とは第一に1967年から翌年にかけての特定の「一年」のことであり、この年はとりわけ世界史的な転換点となったことで、一回的な性格を持つ。他方で本作の「一年」は「日」を単位にして構成されることで、過去における同じ日付の記憶を蓄積しており、その点で反復的な性格をも持つ。つまり「記念の日々=一年の日々」というコンセプトには一回性と反復性の弁証法的運動が内在しており、この二重性は主人公ゲジーネの想起をつうじて現在と過去が相互反応的に入れ替わり語られる本作の物語構造にも反映されている。

本作においては行政や宗教が定める公的なものから誕生日といった個人的なものまでさまざまな「記念日」が現れるが、本論文がとりわけ着目するのは、死をめぐる「記念日」、すなわち命日である。『記念の日々』の詩学をテーマにしたスタンダードな研究とされるフリースの博士論文もまた、本作における命日の奇妙な機能に注目している。奇妙であるというのは、『記念の日々』は一年間における366の日付によって各章が構成されているにもかかわらず、ヤーコプや母親といった主人公にとってきわめて近い人物の命日にあたる章でそのことが言及されないからである。フリースはこの事態について、作品構造を巧妙に利用して日付そのものに語らせようとする「意図的」な沈黙であると解釈する。また、同じく本作における命日の機能を分析したヘルビヒの最新研究は、ゲジーネの母リスベートの命日が実際の日付よりも二日遅れで言及されることに注目し、特定の日付のみを「記念日」として重要視しない「素朴な読み方」を提唱した。他方で本論文は、フリースおよびヘルビヒの読み方を発展的に総合し、〈反射的な読み方〉という新たな可能性を提示した。具体的には、現在のゲジーネにとってすでに感情的な繋がりのない祖父アルベルトの命日を特定し、当該の日付の章においては作者の「意図」を超えるかたちで彼の死の影が反射されていることを指摘した。

次いで、第5章と同様に本作における「コレスポンダンス」と「アレゴリー」の両契機に焦点を当てた。まずは「コレスポンダンス」こそが『記念の日々』の「主要原理」であるというノイマンのテーゼを踏まえ、第一巻および第三巻の冒頭部に現れる「水」のイメージが過去と現在ないし、それぞれの舞台であるメクレンブルクとニューヨークを繋ぐ媒介となっていることを分析した。他方で、同じく「水」のイメージを動機としながらも屋内プールが舞台となる第二巻の冒頭部では、個人が集団や宗教といった抽象を具現化した「アレゴリー」としてのみ存在するニューヨークの社会が映し出されていることを指摘した。

章の後半では、ヨーンゾンの詩学における言語の問題に焦点を当てるという本論文全体の趣旨を確認

しつつ、『記念の日々』における当該の問題を多角的に検討した。この問題については、言語と記憶の関係を検証した「プリンストン実験」を動機とする二つの章において思弁的な考察としても展開されるが、より重要であるのは、そもそも本テキストは成立条件からして特殊な言語状況がかかわっている点である。つまり、本作の主な舞台であるメクレンブルクおよびニューヨークにおいては低地ドイツ語ないし英語が話されているはずであるにもかかわらず、テキストでは標準ドイツ語に「翻訳」されて記されている。特に本作ではこれが介入的な「翻訳」として問題となるのは、バスラーの先行研究が指摘するように、作者であるヨンゾン自身が「同志作家」を名乗る登場人物として作品世界に存在し、ゲジーネの物語を記述しているというある種のメタフィクショナルな設定が存在するためである。しかも「同志作家」はときに異化効果を狙った翻訳をあえてすることで、同テキストの特殊な言語状況をむしろ可視化している。

本章の最後の課題となるのは、『記念の日々』における対話性およびその「境界」の分析である。まず前者については、作者と登場人物を兼ねる「同志作家」、ゲジーネの物語の聴き手である娘のマリー、「おばさん」として人格化されたニューヨーク・タイムズ、そして声をつうじてテキストに現れる「死者たち」の四者を対話性の詩論的形象として解釈し、それぞれの機能を分析した。とりわけ「死者たち」との対話は本作の語りにおける「本質的な要素」(リオーダン)となっている。しかし、〈生者であるゲジーネ vs 死者たち〉という対話的な図式が崩れる瞬間が存在し、それは同時に本作における「対話性の境界」として、本論文にとってもっとも重要な箇所となる。それは、ゲジーネ自身が「わたしが死んだときのために」という想定のもと、いわば仮想的な死者となって、遺言を語る1967年11月29日の章である。本論文はとりわけ、当該の章ではゲジーネがテープレコーダーに語りかけているという点に注目し、キットラーのメディア論を援用しつつ、言語的な分節化=発音(Artikulation)と作家の詩論的プログラムである「真実探求」の関係を考察して論考を締めくくった。